**淡江大学村上春樹研究センター**

**2017年度「第6回村上春樹国際学術研討会」発表者募集のお知らせ**

**（最新版）**

**1.アジェンダ :** 国境と民族を越えて受容されている日本の作家・村上春樹に関連した研究のグローバ

　ルな学術交流と研究成果を図り、語学、文学、教育学、文化人類学、社会学、経営学、翻訳学、心理

学、比較文学、比較文化、文芸学などの様々な視野で「村上春樹学」の意義を捉えるために、淡江大

学では、台湾初の「村上春樹研究センター」（2014年8月）を設立し、定期的に1年に1度「村上春

樹国際学術研討会」を開催することにいたしました。

**2. 主　　題 :村上春樹文学における「魅惑」(charm)**

1. **募集内容 :**各自の専門領域の角度から上述の主題あるいは相関主題の未発表の①学術論文②教育・研究報告。発表は一人一篇とします。二重投稿や既発表の再投稿はご遠慮ください。

**4. 主催者：**淡江大学村上春樹研究センター

**5. 場　所：神戸国際会議場(日本神戸市中央区港島中町6－9－1)**

**6. 時 間：2017年7月16-17日(日、月曜日)**

**7. 使用語言：**中国語、英語、日本語の使用可能（通訳を準備　基本的には日本語を共通語とする。）

**8. 発表時間：**①口頭発表 20分鐘、討論10分鐘

②ポスター発表　規定時間に場所で展示。展示時間に発表者は会場で質疑。

以上の発表内容は、種類ごとに登録順番に編集し、大会当日の会議論文集に收録します。2種類の学

術的価値は同等です。大会後、再度論文を募集審査し、『村上春樹研究叢書』に掲載する論文を選定いたします。

**9. 応募方法：応募時には**[**http://www.harukistudy.tku.edu.tw/downs/archive.php?class=101か**](http://www.harukistudy.tku.edu.tw/downs/archive.php?class=101%E3%81%8B)**ら、申込用紙をダウンロードし、ご記入の上、2016年 7 月31日(日曜日)までに、村上春樹研究センター：曾秋桂先生（村上春樹研究センター主任）**[**ochiai@mail.tku.edu.tw**](mailto:ochiai@mail.tku.edu.tw?subject=%E6%9D%91%E4%B8%8A%E6%98%A5%E6%A8%B9%E7%A0%94%E8%A8%8E%E6%9C%83%E7%94%B3%E3%81%97%E8%BE%BC%E3%81%BF)**へ電子メールでお申し込みください（現在、系統トラブルで申し込みシステムが作動しません）**

**10. 審査方法：**発表要旨について準備委員会で審査後、受け入れる発表の本数と発表者の人数を決定。

**11. 発表受諾通知：**審査結果は2016年9月26日(月曜日)前に通知。

**12. 発表論文全文締め切り：2017年5 月 31 日(水曜日)**。締め切りを過ぎたものは棄権とします。

**13.** 発表の採否に関わらず、応募資料は返却いたしませんが、個人情報は必ず厳格に保護いたします。

**14. 問い合わせ：**淡江大学村上春樹研究センター事務局



電話　+886+2-2621-5656内線2958(曾先生)、内線3590(周子軒助理)

メール：ey1869@gmail.com(周子軒助理)　中国語　日本語　英語　可

**「村上春樹文学における魅惑（charm）」についての説明**

諸橋轍次（1959,1986:689）『大漢和辞典　修訂版　巻十二』（大修館書店）に拠れば、「魅惑」は「魅力を以てひきつけまどはすこと。蠱惑」である。この場合、「魅」は『説文解字』で「鬽、老物精也、魅、或从未」であり、「鬽」も「魅」も「すだま」で「物が年功をつんでよく怪異をなすもの」のことだという。一方、“charm”は小西友七（1988,1994,1995:298）『ジーニアス英和辞典　改訂版』（大修館書店）に拠れば、「感じがよい点」「女の色香」「まじない」「魔除け」「お守り」などといった語義で、筆頭に「魅力」とある。以上のような意味合いを持つ漢字語「魅惑」や英単語“charm”から導かれる村上春樹文学に関する独自の意味を生成、あるいは、発見できれば、それで十分だと思われるが、例えば、主人公を死へとおうとしたと思しい「島本さん」（『国境の南、太陽の西』）は蠱惑的存在であったし、『女のいない男たち』の単行本の帯の「シェエラザード」の説明には「女が情事のあとに語る、世にも魅惑的な話」と記されていたし、幽霊や怪異も長編、短篇の中に出現しており、そもそも村上春樹文学に惹き付けられたからこそ多種多様な読者が存在しているのである。したがって、テーマの提案者としては、厳密な定義付けをするつもりはなく、自由奔放な読みの饗宴を楽しめればよいのではないだろうか。

提案者

中国文化大学副教授

斎藤正志